

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 4 号

2006年5月15日

発行人: 吉谷かおる

「権力ある者をその座から引き下ろし、身分の低い者を高く上げ、」(ルカ1:52)

ルカによる福音書1:39～56

小林幸子(東京教区)

ルカによる福音書1:39～56には、マリアとエリサベツの出会いの物語が書かれています。マリアのエリサベツ訪問の祝日は、5月31日となっています。この二人の出会いについて考えてみたいと思います。

年とった女性エリサベツと若いマリアという二人に、それまでの人生からは考えられない妊娠の報せが突然やってきます。マリアは、天使の告知を聞くとすぐに100数十キロの道を越えて、ガリラヤのナザレからユダの地へ歩いてゆきます。彼女は、思いがけない妊娠を誰に相談することが出来たでしょうか。聖霊によって男の子を産むと言っても誰が信じてくれるでしょうか。石打の刑になるかもしれないのです。どんなに不安で怖かったことでしょう。同じ状況にある年配の女性エリサベツは、マリアにとって友のような、母のような存在だったのでしょうか。妊娠という出来事に直面したマリアには、その友が必要でした。

マリアは妊娠初期、エリサベツは6ヶ月でした。「マリアは、3ヶ月ほどエリサベツのとこ

ろに滞在して」と書かれています。これは丁度、つわりが激しく、食べ物の嗜好が変わり、情緒が不安定になる時期です。まさにこの時のマリアには、助言や心遣いや不安を和らげてくれる思いやりが必要でした。二人の女性は、共に新たないのちを育てて、お互いにいたわり合い、お互いが持っていた不安や重苦しい気持ちを超えて、出会いの喜びがあります。二人は、肉体そのものに神を経験しているのです。

エリサベツは、マリアと生まれてくる子どもを祝福します。エリサベツの信仰告白です。マリアはエリサベツの言葉に励まされ、神を賛美し解放の歌をうたいます。このマリアの賛歌は、あらゆる解放の神学の根本テキストになっています。これは革命のうたと言えるでしょう。サムエルの母、ハンナの純粋な歌と同様、そのテーマは、不公平な状況の刷新、多くの人々の飢餓の終焉、すべてのひとの平等にあるのです。イエスが山の上で語られた説教と重なります。この歌をうたうのはマリアですが、もしもエリサベツがいなかったなら、彼女には歌うに相応

しい「場」もなく、声も出なかったことでしょう。それにしても、マリアという女性に神が目を留めて、彼女と子どもを助けたことは、この状況と同じような境遇にいる多くの女性たちに大きな希望と励ましを与えているに違いないと思います。

この物語は、少なくとも文章化されて定着する前には、(最初期のクリスチャンが口伝えしていた時には)女性たちが中心になって伝えたのだらうと思われます。

マリアの賛歌のなかの「身分の低い者(女)を高く挙げ」は、「おとしめられた者(女)を高く挙げ」であったという研究がなされています。「おとしめられた者(女)を高く挙げ」であったとしたら、それを「身分の低い者」や「とるにたらないはしため」と訳し、解釈されてきたとしたら、女性観にどのような違いをもたらしてきたかと想像します。マリアとエリサベツの共感、実はそこにあったのではないのでしょうか。みなさんはどう思われますでしょうか。

・・・最初のミッションは、女たちに・・・

沖縄教区主教 谷 昌二

今年のイースターには又、新しい発見=気づきの喜びが与えられ、感謝しています。マルコによる福音書の復活の場面。週の初めの朝早く、女たち マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメ が、イエスの葬られた墓に出かけます。墓の入り口を塞いでいた大きな石も、すでにわきへ転がしてありました。中を覗くと、白い長い衣を着た若者が、右手に座っている。女たちはひどく驚きます。その彼女たちに、若者が告げます。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なされて、ここにはおられない。・・・さあ、行って、弟子たちとベテロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われていたとおり、そこでお目にかかる』と。」

この時、女たちはどうしたでしょう？ “婦人

たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。”

気づき 1: 復活の証人として、最初に遣わされたのは、女たちであったこと。教会の原点は「ミッション」=「遣わされること」にあります。なんのために遣わされるのか？ 復活のイエスを伝えるために。あの十字架の上で死んで葬られたナザレのイエスが、確かに復活したこと。十字架の上にすべてを捧げて死んだイエスは、神の新しい命によって、私たちの間に生きておられる。このことを述べ伝える。この使命をもって遣わされるのです。

そのミッションを最初に担ったのが、女性たちであったのです。これは驚くべきことではないのでしょうか。せつかく使徒(遣わされた者と言う意味)の名を貰いながら、12使徒たち男ど

もは、十字架の前で全部逃げ去っていたのです。その意気地なしの男どもに、この女たちが遣わされたのです。なんという恵みでしょう。ここで、男たちは、もう一度初めに与えられた「使徒」の原点に立ち返ることができたのです。

但し、マルコによる福音書では、せっかくのミッションにも拘わらず、婦人たちは、喜ぶどころか、その場から逃げ去り、震え上がり、正気を失って、だれにも何も言わなかったとあります。あの壮絶なイエスの十字架のもとに立ち止まることができた彼女たちでも、イエスの復活の知らせに、なぜこんなにも取り乱しているのでしょうか。

人間死んだらおしまい。後には何もない、ただ絶望あるのみ、という強い観念と、死ぬことの恐ろしさに圧倒されていたものが、それを越える世界などあるはずがない。あったとしたら、もっと恐ろしいに違いないという感覚でしか受け取られなかったのでしょうか。

他の福音書では、この頑なな心を打ち破るように、復活のイエスとの実際の出会いが記されています。それで初めて、彼女たちも、ミッションを担う本当の証人となれたのです。こうして、女性たちに、最初のミッションが委ねられたのです。

気づき2: トマスも、そうでした。彼は、合理的な精神を持つ男性。他の弟子たちが、復活のイエスに出会ったと証しているのに、彼は自分で確かめないと信じないと頑なです。このトマスに、イエスの方から出会いに来られます。「あなたの指をここに当てて、わたしの手をみなさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしの

わき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」イエスはここで、疑うトマスを、無条件に受け入れていることが分かります。わたしはお前を信じている。そのように、お前もわたしを信じて欲しい。この時、トマスの発した言葉が感動的です。「わたしの主、わたしの神よ。」あなたが、こんなわたしを、こんなにも受け入れてくださっている。ありがとうございます。このわたしを、すべてあなたに委ねます。

「わたしの主」とは、“わたしがわたしの中心ではなく、あなたがわたしの中心として、わたしはあなたに委ねます。そのようにわたしはあなたを迎えます”という意味ですね。“聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えない。”(コリントの信徒への手紙一12の3)

仏教で、「南無 阿弥陀仏」と言います。“南無”(ナム)とは、委ねる、お任せするという意味です。「主」イエスも同じです。イエスを主として、わたしのすべてを委ねるのです。この気持ちを込めてこれが口から出てくるとき、とっても嬉しい恵みが与えられます。

トマスが、「わたしの主」と口に出した喜びを、女たちも体験して、イエスにすべてを委ね、イエスをしっかりと心に迎えて、最初のミッションを担ったのです。

私たちの礼拝に喜びがないとしたら、この「主」を、私たちが余りにも感動なしに口に出しているからではないでしょうか？ どうか、祈り書に出てくる「主」一つ一つに、委ねる喜びを込めて祈ってください。礼拝が変わります。

第50回国連女性地位委員会・全聖 公会女性ネットワークに参加して

神崎直子（東京教区）

去る2月23日から3月8日まで、アメリカ・NYの国連で開かれた、第50回女性の地位委員会に、全聖公会女性ネットワークというNGO団体として参加してきました。この集まりは同時に、全聖公会女性ネットワークの集会でもありました。国連での会議を傍聴し、また、各管区の女性に関する問題を分かち合い、共に礼拝の時間をもち、相互のネットワークを作るというもので、日本聖公会の参加は昨年を引き続き2度目です。もちろん集まったのは女性ばかり100人近く！主教、司祭、神学生やシスターをはじめ、女性に関する分野のエキスパートが、ほぼ全管区から集まったのです。

国連での会議のテーマは二つ。開発における女性の参与の強化：特に教育、健康、労働の分野を考慮に入れたジェンダー平等と女性の進歩向上を可能にする環境について。あらゆるレベルでの、意思決定プロセスにおける女性と男性の平等な参与について。本会議では、各国の政府代表からさまざまな現状・問題の報告がなされていましたが、どれも様に芳しいものではなく、それよりも、本会議と並行して行われた世界中のNGOによるサイドイベント

それぞれの専門分野(国より大きい地域ごとの団体、女性・子供への暴力について、女性への教育について、HIV/AIDSについて、移民や買春についてなど様々でした)の活動の報告や、ネットワーク作り に大変な活気を感じました。

しかし、なによりも今回、聖公会につながる

女性の一員として私を力づけたのは、それぞれの管区で地道に活動している女性たちとの出会いでした。私たちと同じアジアからの人は言いました。「私は他の人より教育があるからという理由でこういう働きをしているのじゃないのよ。困っているほかの女性みんなのためにしたいことがあるからよ。」その言葉どおり、彼女たちは、それぞれの地域で最も大切と思われる女性の問題に真摯に取り組んでいる人々でした。また、女性の視点を前面に出した礼拝に参加できたことも新鮮な経験でした。聖書の読み方も、祈りのはじめ方も、少し違っていました。「母なる主よ、」と呼びかけることがこんなに新鮮なことだとは！

日本聖公会の教会が直面している、女性についての問題はどんなことでしょうか。教会の中で、女性であるということについてどんな意識をしたことがあるのでしょうか。社会の中で困難な状況にある女性に、どのような働きかけができていますでしょうか。アジアの女性政治家によるサイドイベントで、大変興味深い発言を聞きました。「かつて農耕などを主とした生活では、男性の力が生活に不可欠だった。それは男性に頼る社会ができて自然なことだった。しかし、現代社会はどうか。情報化社会となり、機械化が進み、力仕事は必要がない。社会的な不安や問題は日常生活・家庭生活の中にこそある。家庭での知恵を持っているのはいまや女性だ。女性はその能力をもっと政治の場に生かすべきだ」と。国連本会議のテーマでもあったように、

あらゆるレベルでの意思決定に女性の参与が求められている理由はここにあると思いました。これは、もちろん教会の中でも言えることでしょう。

私は一女性として、もっと日本で目を開いてみたくなりました。そして、聖公会の女性とし

て、あのパワフルな女性たちと、神様のもとにひとつであることを確認した今、大変に力づけられています。今年8月には、日本聖公会の女性会議が開かれます。他の管区の人々も、このニュースをとっても喜んでくれました。学び多い会議となることを期待しています。

公開学習会

「教会とセクシュアル・ハラスメント」他教派の経験に学ぶ 報告

主催：正義と平和委員会ジェンダープロジェクト

京都教区宣教局社会部

協賛：女性が教会を考える会・京都

公開学習会が3月24日(金)午後6時半～9時まで京都教区センターにおいて行われました。参加者は約40名で東京教区、神戸教区等遠方からの参加もありました。講師に日本基督教団の上田律子さん、日本バプテスト連盟牧師^{いまぎれ}今給黎真弓さんをお迎えしました。お二人は教会の中のセクシュアル・ハラスメントの問題に関わり取り組んでおられます。京都教区の事例について経過報告した後、それぞれの教派でのことを話していただきました。

上田律子さん：神の前で全ての人々が平等である教会においても、権力構造が存在します。セクシュアル・ハラスメントはその権力構造の中でおこります。かつて教団の性差別委員会において、1998年9月11日(午前9:00～午後9:00)のたった1日でしたが、セクシュアル・ハラスメント被害者のための窓口を開設したことがあります。その時、7件の電話がかかってきました。7件の電話がかかってきたということは、実際はもっと多くの方が被害にあわれたので

京都教区宣教局社会部 伊藤美佐子
はないかと想像されます。今まで話す場がなかったのでしょうか。沈黙を守っておられたのでしょうか。人に話すということは、辛いことなのですが、話しても聞き入れられないということがあります。そのような時、絶望して裁判をおこすということがあります。裁判をおこすということは、被害者は二度辛い思いをするのです。被害者が非難を受け、沈黙、教会から離れるということがおこりました。そして加害者が守られゆるされているのです。どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私たちは教会という土壌を検証し、苦しんでいる人たちの声に耳を傾け寄り添う存在になりたいものです。

^{いまぎれ}今給黎真弓さん：セクシュアル・ハラスメントとは大きな人権侵害です。受ける側が望まない性的な言動、ふるまいのすべては、地位の上下、権力の有無といった力関係の中でおこってきます。被害者の判断が基準であり、被害者の声を聞いていく必要があります。セクシュアル・ハラスメントを起こさないためには、自分

の見方や考えだけでなく、相手がどう思うかを考えることです。過去に、牧師がそんなことをするわけではないと被害者の痛みを受け入れず、牧師から性的虐待を受けたという相談を黙殺してきた罪があります。教会のあたりまえを問い直す必要があります。ゆがんだゆるしから教会は解放され、被害者が回復され、加害者の人間性が回復されるのです。教派にとらわれず、痛みをおっている人々がつながり、つながりの中から、イエスが歩んだように歩みだします。

お話を聞いた後、4～5人のグループに分かれて、参加者それぞれの思いを分かち合いました。最後に聖歌を歌い閉会となりました。

セクシュアル・ハラスメントについて、教会に属するひとり一人が自分のこととして捉え、今後、何をすべきか、何ができるのかと考えていきたいと思います。そして、セクシュアル・ハラスメントを防ぐための組織、そして被害者ための支援・相談窓口ができること願っています。

日本国憲法第 24 条は変えられてしまうの？

松原恵美子 (大阪教区)

結婚は、当事者が同意すれば、それだけで成立します。結婚とは、当事者どうしがおなじ権利を持つことをふまえ、たがいに力をあわせて維持していくものです。

結婚相手をえらぶことや、財産にまつわる権利や相続や、どこに住むかをえらぶことや、離婚など、結婚と家族にまつわる法律は個人の尊厳と両性の真の平等をふまえてつくられます。

『やさしいことばで日本国憲法』より

「あいのり」という人気のTV番組がある。私が日頃接している高校生たちもよく見ている。先日の放送でスイスの徴兵制のことが扱われていた。出演者の20代の人たちが「考えられない」「家族がお国のために死ぬなんていやだ」などと言っていた。さっそく、授業のネタとして使った。TVでは触れていない「あいの

り」はフジテレビ憲法9条が改正(改悪)されたら徴兵制はありうるのだということにもふれながら。

9条が改正(改悪)されたら、「男は国を守るもの、女は男を支えるもの」的な考え方が全面に出てくるであろうことは容易に考えられる。4月29日、京都教区での憲法学習会で、96条改正(国民投票)の背筋も凍るおそろしい話を聞いた。これが通れば、与党の思うとおりに憲法が変えられていってしまう。一つが変われば、いもづる式に何もかもが変えられていってしまうのだ。自民党憲法調査会憲法改正プロジェクトチームが2004年6月に公表した論点整理の中に「婚姻・家族における両性平等の規程(現憲法24条)は、家族や共同体の価値を重視する観点から見直すべき」とあるように、24条をそのままにしておくわけがない。自民党の草案には

「公共」という言葉がよく使われている。論点整理と草案から「男女不平等な性別分業型家族に基礎を置いた軍事国家へと日本をつくりかえる国家構想」が浮かびあがってくる。「女らしく、男らしく」ではなく「私らしく」生きることが困難な時代が再びやってくるのだろうか。

私は学生の頃、24条のことを全く気にとめていなかった。24条について思いをもったのは、

1994年に「私は男女平等を憲法に書いた」というTV番組(朝日放送)を見て、はじめてベアテ・シロタ・ゴードンのことを知ってからだ。『冬の蕾 ベアテ・シロタと女性の権利』という漫画の本があるのだが、その最後に「あとから来る女性たち、そしてもちろん男性たちにもより人間らしい性が実現できるよう、そういう社会を手渡していきたい」という言葉があった。24条は女性だけの問題ではないのだ。

北京行動綱領」って何？その2

大岡左代子 (京都教区)

「北京行動綱領」について、前号からの続きです。

★ ★ ★ ★ ★

F. 女性と経済

これは前号に書いた「女性と貧困」と密接な関わりがあります。日本では、男女雇用機会均等法の改定により、賃金格差の原因は性差にはないと国連に報告していますが、本当にそうでしょうか？均等法の改定に伴う規制緩和によって、多くの女性たちは不安定雇用においやられている状況にあります。不安定雇用が賃金格差につながるのは自明の理です。社会全体が不安定な中で、経済的に影響を受けているのは女性だけではないのですが、もともと経済基盤の弱い存在である女性はより影響を受けやすいのではないのでしょうか。ちなみに日本の賃金の男女差は、女性は男性の46%。ケニアの71%、スウェーデンの84%、オーストラリアの71%に比べるとかなり低いグループに入ると言えます。

G. 権力および意思決定における女性

今年の第50回国連女性の地位委員会のテーマが「意思決定における女性」でした。国連では1995年までに意思決定レベルにおける女性の比率を30%にするという目標がありましたが、私たちの身の回りではどうでしょうか？たとえば国会議員における女性の比率は衆議院で9.2%、参議院で14%。世界で137位です。一番多い国はルワンダで49%、スウェーデンで45%だそうです。数があればいいという問題だけではありませんが、あまりにも不均等な比率はやはり是正する必要があるのではないのでしょうか。数が増えると同時に、女性自身が意思決定に参画していく主体性も課題かもしれません。

H. 制度的仕組み

男女共同参画会議が2001年に発足し、その後男女共同参画室が参画局に格上げされたこと、男女共同参画社会基本法が制定されるなど、制度としては整っているようにみえますが、ここ数年のジェンダーバックラッシュの波のなかで、「男女共同参画」という言葉さえ語ることが難しい場面もでているようです。女性官僚の中にも、共同参画の流れに逆行する発言もあり、流れを促進できる官僚の登用なども制度の中の重要な要素だと思います。また、国連女性の地位委員会では政府代表団の中にNGOの代表が入り、NGOが政府と協力している様子を目の当たりにしましたが、まだ対等なパートナーシップの関係とは言えないように感じました。形だけでなく、実質の伴う制度が整えられ、ジェンダーの視点に立った政策が実行されていくことを望みたいと思います。

I. 女性と人権

人権とは何でしょう、と問われてみなさんはどう答えられますか？一言ではなかなか表現できないと思いますが、どの人にも平等に与えられているもの、誰からも取り上げられることがないもの、取り上げられたら生きていくことができないもの・・・と捉えたら少し具体的に浮かんでくるかもしれません。子ども達に「人権」の大切さを伝えるワークショップCAPでは安心・自信・自由という言葉で人権のもつ意味を伝えています。誰もがその人らしく、

安心して自信をもって自由に生きるためにはそれを阻害しているものを取り除いていかなくはなりません。「女性はこうあるべき」「男だからこうするべき」などジェンダーバイアスに基づいた社会的な慣習や考えは、とすれば人権侵害につながるということを認識したいと思います。

今回は、4つの項目について書かせていただきました。国連や世界女性会議で決められたことが私たちの生活にどう結びつくのか・・・比較的経済的に豊かで、日常生活に支障がなければあまり縁がない事柄なのかもしれません。「女性と」、「女性と」と書かれていると女性たちが権利だけを主張しているように感じられる向きもあるようです。「男女同権の時代に女性、女性と声高に叫ばなくてもいいでしょう。十分に女性は強くなりました。」という声もよく聞きます。しかし、本当にそうでしょうか？もともと差異をつけられた社会の仕組みの中で生きてきている私たちは、気がつかないうちに差異をつけられていることに馴らされてしまっています。そして、その差異のある社会に生きてきて生きにくいと感じた人、差異をなくし、もっと一人ひとりがその人らしく生きたほうがよりよい社会をつくれると思った人たちの思いが国連や世界の女性の動きに繋がっているのだと思います。女性の問題は女性だけで解決できるものではなく、すべての人とよりよいパートナーシップを築きながら考えていきたいものです。(次号は最終回、「女性とメディア」「女性と環境」「女兒」です。)

♪ ♪ Book Review04

評者：吉谷かおる

『女教皇ヨハンナ』(上・下) ドナ・W・クロス (草思社、2005年、各1900円+税)

ローマ教皇の被選挙権をもつのは、カトリック信徒の男子、と定められています(実質的には、枢機卿の中から互選により選出されるのですが)。いまも昔もカトリック教会では女性が聖職者になることは認められていないのだから、「女教皇」ということは自体が変、といえます。しかし占いに用いるタロットのカードには、「教皇」だけではなく、「女教皇」もいます。このカードの別名はPope Joan。そのモデルとされるのが、本書の主人公、女教皇ヨハンナ(原著ではPope Joan)です。いくらその実在が否定されようと、女性の教皇がいたとする伝承は今日までしぶとく生き残っています。

彼女にまつわる伝説は、要約すると、つぎのようなものです。「850年代に、マインツ生まれのヨハン・アングリクス(実は男装の女性)が、すぐれた学識により尊敬と権威を獲得し、教皇に選出されヨハネス8世となったが、愛人の子を身ごもり、コロッセオに向かう途中出産して死亡した(あるいは騎乗中に出産し、馬の尻尾に足をくくりつけられて引きずられたすえに石を投げられて死んだ)。」この伝説に取材し、歴史大河口マンズに仕立てたのがこの作品です。『ダ・ヴィンチ・コード』の大成功以来、日本でもキリスト教美術・歴史ミステリーの人気が高まっているので、この本もますます歓迎されました。キリスト教に関心のなかった人にも、一種の立身出世物語・中世女性版として読まれ

ているようです。「罪は女より出でし」と呟く下級聖職者と異教の母とのあいだに生まれた、人一倍聡明で知識欲の旺盛な片田舎の少女(ヨハンナ)がどうやってローマへ行き、教皇の座につくにいるのか。荒唐無稽ともいえる伝説に歴史的リアリティをもたせるため、フランク王国の分裂、教会の権力闘争、疫病や災害などの描写にかなりの努力が払われてはいますが、ストーリー展開がはやいので、上下2巻本ですが、いっきに読めます。800年代西欧の歴史・習俗を楽しく読めるという意味では、かつてない貴重な作品です。

愛人の子を出産、というエピソードを生かすために、少女時代からヨハンナが思慕をつのらせる相手、ゲロルト伯が重要な人物として登場しているのですが、この人と結ばれる過程がメロドラマふうなのが不満といえは不満です(この人は中世離れ?しているのではというほど彼女の理解者、対等なパートナーとして描かれています)。最も強い印象を残すのは、女性には読み書きを教えない時代に(男性の識字率も低かったのですが)、少女時代のヨハンナが父親のすさまじい虐待にも屈せず、文字の習得に執念をみせ、学問に意欲を燃やすところですが、兄は向いてもいない勉学を強要されているのに、自分の名前をつづりすら教えてもらえないヨハンナの悔しさが伝わり、なんで女はこんなにも長い長いあいだ教育から遠ざけられて

きたんだらう!!と、おとなげないほどの怒りをおぼえました。『愛のイェントル』(1983年)という映画でパーブラ・ストライサンド演ずる主人公は、20世紀はじめの東欧で、男性のみが入学できるユダヤ教神学校に男装して入学してしまいます。無類の勉強好きで、その達成度にも自信があるのに、能力を発揮する機会がまったく与えられないとしたら、男装して教育機関に潜り込むしかないという、まさにヨハンナと同じケースです。偶然でしょうが、フランス救国

のヒロイン、ジャンヌ・ダルクの英語名もJoanです。ヨーロッパでは、男装の女性がときに歴史から突出するように現われ、伝説化して人気を博することがあるようです。しかしたまたま活躍する女性がいたとしても、それはそれだけのこと。私にとっては、もしかしたら女教皇がいたかも、という程度のことで気の晴れる問題ではないです。現代でも、とすれば女性から教育を取り上げようとする国や権力があらわれないとは限らないのですから。

第1回日本聖公会女性会議のご案内ができました。

前号でお知らせしました第1回女性会議の案内書(申込書つき)が出来ました。各教会にお届けしていますので、どうぞご覧下さい。今のところ下記のようなことが決まっています。3泊4日間、盛りだくさんな内容ですが、みんなでつくりあげる女性会議です。ぜひ、ご参加下さい!

(募集人員に達し次第締め切りとなりますのでお早めにお申し込み下さい)

聖書を通しての発題、バイブルシェアリング

“世界の聖公会女性は、今”・・・全聖公会女性ネットワーク(IAWN)コーディネーター、アリス・メドコフ司祭をお迎えし、世界の聖公会女性達がどのように宣教課題に取り組んでいるのかをお話しいたします。

分科会・・・教会におけるジェンダーに関する課題の他、軍事化、女性への暴力、HIV、環境問題など社会の諸課題に関する分科会を13の分野に分けて準備中です。

ゲスト・・・お隣、大韓聖公会からもお客様をお迎えします。韓国での女性達の働きについてご報告いただきます。

ステートメント・・・会議最終日には、私たちの願いや祈りを言葉にのせたステートメントを採択します。私たちの教会がこれからどうあって欲しいのか、考えるのは私たちひとり一人です。

(ステートメントstatement・・・日本語で言うところとちょっと固い感じですが「声明」という意味です)

ジェンダー—口メモ 「セクシュアリティ」とは???

最近、ジェンダー研究だけでなく、セクシュアリティ研究が注目されています。どちらも、生物学的性別である「セックス(sex)」を私たちの文化という文脈の中でどうとらえるかを考え直すよう促している学問研究です。ジェンダー研究は女性解放運動の流れから生まれた女性学から始まり、セクシュアリティ研究は主に同性愛者差別への問題提起によって注目されるようになってきました。これらの研究領域は広範で、互いに影響を及ぼしながら発展してきました。

「セクシュアリティ」とは、性的(sexual)であることの内容を指し示す抽象名詞です。性とか性的とかいうことは、本能に属することだし、とても個人的な、プライベートな領域のことなのに、どうやって研究するのだろうか?と皆さん思われますよね。しかし、性についての考え方は時代や文化によって変動していくものだということを理論的に教えてくれたのがこの研究です。例えば、女性と男性の異性愛は本能的に自然なことだから歴史的に変動することはないはずと考える人は一般的に多いでしょう。しかし、哲学者で歴史家のM・フーコーは数千年前のギリシャでは、あらゆる性愛のなかで男性同性愛が一番価値あるものとされていて、異性愛は価値の低い性愛だと考えられていたことを明らかにしたのです。そして、同性愛を何らかの病理ととらえる考え方は、近代に特有の現象であることを『性の歴史』という著書で明らかにしました。それからセクシュアリティ研究が人文社会科学の領域で行われるようになりました。生殖を人間の宿命ととらえることを「生殖宿命主義」というのですが、それによって異性愛が「自然であたりまえ」と考えられ、一方で同性愛という性的指向を持つ人は心に何か問題を持っている人だという差別観が生まれてきました。しかしこの「自然であたりまえ」をもう一度考え直してみる必要があるのでは?という問いかけがされているのです。

もう一つの大きな問題は「性自認」です。生まれた時に言い渡された性別と自分の性別のアイデンティティは一致しているのが「あたりまえ」と思われてきましたが、本当にそうだろうかという問いかけです。と同時に生まれる時に女/男という二つの性別に必ずしもきちんと分かれるわけではないことも考え始められています。メディアで「性同一性障害」が時々取り上げられていますが、そういう人たちも世の中には存在することが少しずつ知られるようになってきました。

性別、性差について「自然と本能」だと思われてきたものが、「社会と文化」が作り上げてきたものであることに気づかせ、女性自身や同性愛者が問題なのではなくて、問題はそれを取り巻く社会や文化における意識やシステムであって、それらを変革する必要があるのではないかという問いかけをしているのが、ジェンダー研究とセクシュアリティ研究だと言えるでしょう。(三木メイ)

「タリタ・クム」について

「タリタ・クム」というのは、「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとってイエスさまが言われた言葉です。(マルコ5:41) 今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神様の祝福によって主の栄光をあらわすためにより生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。(三木メイ)

ジェンダープロジェクトからのお知らせ

ジェンダープロジェクトでは、ジェンダー問題への「気づき」や「理解」を促すための「出前ワークショップ」という参加型の学習プログラムを用意しています。

- ・“「出前」って？”・・・ご要望によりこちらから皆さんのところへ出向いて、ワークショップを提供します。
- ・「参加型学習」って？”・・・「人は聞いたことは忘れる。見たことは覚える。したことは理解する。」という言葉があります。参加型学習においては、講師の話を書く、というよりは例えば下記にあげたような方法での学習を通して、参加者どうしがお互いから学び合うことを大事にします。
- ・“どんなプログラム？”・・・ロールプレイや小グループでの話し合い、ゲームやクイズ、コントなどを通して、「ジェンダーって何？」ということについてまずは考えてみます。

*時間的なことやプログラム内容、経費などについてのお問い合わせは下記までお願いします。 出前ワークショップ担当 木川田

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3~4回発行予定) 女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。よりよい紙面にしていくために、ご意見・ご感想をお待ちしています。女性会議も近づいてきました。ぜひこの夏、箱根でみなさまとお会いしたい、とスタッフ一同たのしみにしております!! (吉谷)
